

農村フィールドワークで 迷子にならない方法

筆者は東南アジア農村を対象とするフィールドワークを実施し、農家調査に基づく研究を行ってきた。筆者にとってフィールドワークの目的は、(1)問題背景と事実関係を確認すること、(2)問題の理解を促す仮説を形成すること、(3)仮説を検証するための実証手段を見出すこと、の三点に要約される。実際の分析に先立って行われるこうした作業の重要性を鑑みると、研究の良し悪しは分析を開始する前におおかた決まってしまうと考えて差し支えないように思う。フィールドワークが重要な理由である。

残念なことに、フィールドワークが目的に沿って理路整然と進むことは稀であり、満足できる仮説や実証手段を見いだせないまま帰国の途に就くこともある。目的にたどり着く道筋があらかじめ見えないことはフィールドワークの醍醐味であ

るが、それ故に、迷子のままフィールドを去ることも珍しくないのである。迷子になる理由には、調査の時間的な制約もあるが、それ以上に筆者の経験不足によるところが大きい。そのため、筆者が語れることはフィールドワークで迷子になる方法なのだが、ここでは我が身を反省して迷子にならない方法を考えてみたい。

●農村フィールドワークで わかろう

農村フィールドワークの目的を達成するためには、関連する全ての情報を収集する必要がある。農村は生活と生産の現場が重なり合う空間であり、実際にはそこを訪れるだけで様々なことがわかる。農家の暮らしぶり、はもちろんのこと、農地利用や作物選択、家畜や農業機械の保有、インフラ水準など観察によってわかることも多い。農家

にインタビューを行うことができれば、さらに多くのことを学ぶことができる。個々の農家の経済状況に加えて、農村の組織についても知ることができ。農村には水利を中心とした生産関連組織や生活を支える社会組織が存在し、研究テーマによってはこうした組織の役割に十分な関心を払う必要がある。

これらの情報を得るため、農家インタビューでは必ず聞くべき内容がある程度定まっておき、それらをこなすだけでも結構な時間がかかる。一通り定型化された質問をしたあとは、思いつく範囲で関連する情報を尋ねていくことになる。ところがここで、厄介な問題が生じる。関連する全ての情報として何が含まれるか、事前にはわからないという問題である。一般的に、初めて訪問した先で、農家が質問されないことを雄弁に語りだすことはあまりない。調査に非協力的だからではなく、こちらの知りたいことに応えようと質問を待っているのである。そのため、農家インタビューで自らの想像の範囲外にある情報を得ることはほとんど期待できない。

最初に得られた情報の印象に

引きずられて、関連する情報の収集が疎かになってしまいうけりもある。いま、土地生産性の上昇が、生産規模分布にどのような影響をもたらすか知りたかったとする。筆者らの調査地では、ダム建設に伴って、西側では地表灌漑が利用可能になった一方、東側では灌漑建設がなされていない状況が確認された。そこで、灌漑建設による土地生産性上昇効果を利用して、西側と東側の農業生産構造の変化を比較することを考えた。灌漑建設以前の状況は、差がないという話を聞いたためである。ところが実際には、ダム建設に伴う地下水位上昇により、東側でも農家個別投資による地下灌漑が普及していたのである。この事実を確認したのは、調査もほぼ中盤に差し掛かったころである。東側では灌漑が存在しないという思い込みから、西側の灌漑利用状況を調べることに専心していたのである。

本来は知り得たにもかかわらず、知識や経験の不足、想像力の欠如、思い込みによって見過ごされる情報の存在は、筆者にとって現実的な懸念である。懸念を最小限にするため、基本的だが以下の方法が有効だと思っ

ている。第一は、同様の質問をなるべく異なる階層の農家に尋ねることである。回答の違いと理由から、予期しなかった情報の存在に気づくきっかけが与えられる。経済発展が進む東南アジアの農村は、農家だけが居住する空間ではないため、時間があれば非農家からも話を聞けると良い。第二は、熟練した他の研究者と一緒に調査を行うことである。他の研究者は自らとは異なる視点を提供してくれるため学ぶことが多い。自らの思い込みを正してくれる。第三は、相手に調査意図を正確に伝えることである。これは、意図を理解してもらうことで関連する情報が自発的に提供されることを期待するものである。ただし、調査意図をあまりに強調しすぎると、農家の回答に一定の方向性を押しつけることにもなりかねない。少なくとも、調査の初期段階で研究者の仮説を披露するようなことは控えた方がよいと思う。

●農村フィールドワークでわからないこと

関連する全ての情報を得ることができれば、仮説の形成やその検証方法を見出すことはぐっ

と容易になる。しかし、農村フィールドワークであらゆる分析が可能になるわけではない。情報には量だけでなく質の問題もあるが、農村フィールドワークで得られる客観的で正確な情報は実のところほとんどない。農家の生産活動は季節性や各圃場の条件に左右されるため、時期や圃場を区別して質問をすることがある。ところが、細かい区分ごとに正確な情報を提供できる農家は多くない。記憶には曖昧さがともなう。今のところ正確な記録をとめておくインセンティブが農家にとっても大きくないためである。したがってある程度の誤差を含む情報で満足することになる。この問題を避けるために、農家と取引関係にある業者の情報を引くことがある。例えば、サトウキビ農家であれば、製糖工場との取引履歴情報から、収穫時期、販売量、単価、糖含有率を得る方法があるだろう。地理情報システムの活用も、近年ますますその重要性を増している。圃場位置や面積、耕作者属性などの基本的情報がシステムに統合されていけば、分析の正確さが増すうえに、適用範囲も拡大する。ただし、こうした客観的情報が

利用できる文脈は依然として限られている。

農村フィールドワークでわからないもうひとつのことは、全ての農家間で共通する情報の意味である。農村フィールドワークでは調査を効率的に実施するため、対象を特定の地域に限定することが多い。こうした地域内では、市場環境やフォーマルな制度・政策が同じになる。農家の経済状況を規定する重要な要素であるが、違いが見当たらないため、農村フィールドワークによって影響を分析することは至難の業である。インフォーマルな制度や農家の主観的態度についても同様のことがいえよう。筆者の経験によればリスクへの態度、現在と将来に対する考え方、他人に対する信頼感など、主観的態度は農家間で全くバラバラになることはなく、むしろ地域で一致する傾向が強いように思う。外生的な要素であれば、農村の社会的相互作用を通じて形成される内生的な要素であれば、地域で共通する情報については、ひとつの農村フィールドワークから直ちに結論を導かないという自制心が必要である。これらの点に関心がある場合は、農村フィールドワークの

範囲を広げ、様々なタイプの農村に注意深く目を向けることが求められる。

農村フィールドワークで迷子になる状況は二つに大別できる。第一は、農村フィールドワークでわかるはずのことを見過ごしたまま、仮説形成や検証に向かう状況である。この状況を直接確かめるすべはないが、その場合、自らも結論に対してしっかりとこない感覚を味わうことになる。第二は、農村フィールドワークでわからないことを考慮せずに、仮説形成や検証に向かう状況である。その場合、当然ながら上手くいく可能性は小さい。

こうした状況に陥らないために、やはり同じ農村に何度も足を運んで継続的に調査することは重要である。時間を通じた変化を観察することで、それまで見落としていた情報の存在に気付くことがある。また、変化の対象が一部に限定される場合は、仮説検証が容易になることもある。現実には起る変化は、研究者にとっては予想の範囲外であることもしばしばであるが、継続的にフィールドワークをしていけばこそ、突然の変化から学ぶ機会も大きくなるのである。